**証　　２０２２．１．３０**

**梅谷 興三**

**私は中学生で、昭和23年16歳の時、兵庫県明石市の人丸教会で洗礼を受けました。敗戦後数年たっていました。まだ回りは戦争の傷跡深く、手付かずの状態だったと思います。父は医師であったのですが、過労であったところへ、腸チフスという感染症にかかり何日も高熱にうなされた上死亡、母親も後を追うようにして亡くなりました。残されたのは１１才上の兄と姉と３人で、兄は学徒出陣から帰り、兄の働きで家計はなんとか支えられたようです。毎日が味気なく、寂寞とした日日が続きました。しかし教会では礼拝後、昼によく大きなお釜で雑炊をいただきました。英国の宣教師バークレー・バックストーン師が戦前に日本の松江で始めた超教派の教会で「日本伝道隊」です。私共は隣町西明石駅の近くに住んでいました。入信のきっかけは、私どもが住んでいる村までこられ、週日に夜の家庭集会や土曜の午後中学生のための英語による聖書を読む会が開かれていたのです。私にとって生まれて初めての聖書の世界は新鮮でした。特に「山上の説教」のイエスの言葉はユダヤ教の習慣となっていて、しかも日常生活の隅々までを支配していながら、形骸化していた「律法主義」に対する厳しい批判でした。律法主義を批判しながらも基本を守ることが逆に律法を完成するものだという、その純粋さにうたれました。　当時は教会では「武士道」の影響をうけた、　内村鑑三の本が読まれ、姉は「ヨブ記」私は「求安録」などを読んで，毎週教会へも通っていました。しかしある時教会員で広島文理大を出られた数学の先生が「毎週教会に来ていて勉強の方は大丈夫ですか。」と言われたのです。これはすごい忠告でした。**

**大学にはいってからは、数年後YMCA（学W）の寮（地塩寮）に入寮でき、他の学部の学生との交流を楽しむ機会をあたえられました。医学部の学生から「帝王切開」の話、経済学部の学生からは「資本論」の概要について、文学部の友人とは裁判記録（チャッタレー裁判）を見ながら「文学と社会性との関係」などを考える機会を得ました。が何といっても共通問題は「信仰と学問することは矛盾しないか」―信仰の個別性と学問の客観性―でした。**

**社会に出てからは４０年間、建設業しかもトンネルを主体とした土木工事で、大井川上流の発電所関連工事や新幹線の工事でした。怪我人の世話や、会計の仕事が主で、この間は教会には行きませんでした。しかし退職してから、沼津で「愛鷹伝道所」の世話をしていた女房の両親が近くに引っ越ししてきて間もなく、金沢文庫教会に通うようになり、私どももお世話になったのです。こうして再びキリスト教に接し、遠藤周作をはじめとする諸作品の読書会に参加させていただくこととなり感謝であります。ただ聖書は何人もの記者によって書かれており、奥が深くわからない面（多くの奇跡物語など）が今もあります。**

**最後に最近感じた話をしておしまいにします。それは『アメージンググレース』という讃美歌です。この英語の歌詞が素晴らしい。作詞は　ジョン、ニュートンという、英国人で、母親は敬虔なキリスト教徒だったといいます。彼は荒々しい奴隷売買に関係する船長でした。ある時台風に会い船は沈みそうになった時、始めてお祈りをしたそうです。船倉の荷物が船の穴を防ぎ無事助かったということです。ジョン、ニュウトンは、やがて回心して牧師になりました。**

**最初の一節を読ましていただきます。**

**Amazing grace, how sweet the sound**

**That saved a wretch＊ like me　　　　　＊惨めな人、人でなし**

**I once　was lost, but now found**

**Was blind, but now I see 　　　　　　　　　以　上**